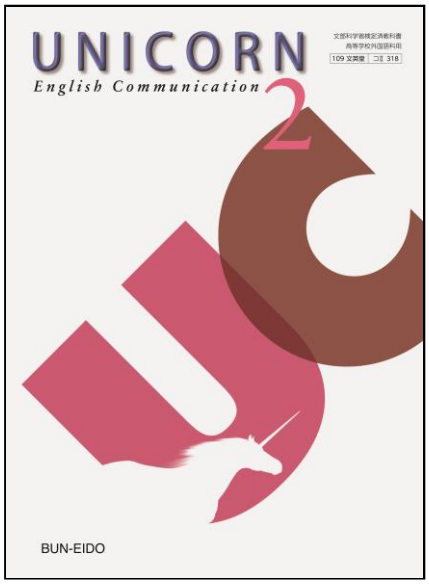
UNICORN と Grove における
表紙のデザイン

グラフィックデザイナー／武蔵野美術大学教授　白尾隆太郎

教科書の表紙は，本編を白本という形で文部科学省への提出を済ませた三ヶ月後に作成される．つまり，すでに決まっている教科書の内容に合わせ，柔らかい印象で，そして持っていて楽しくなる“顔”を考えなければならない．

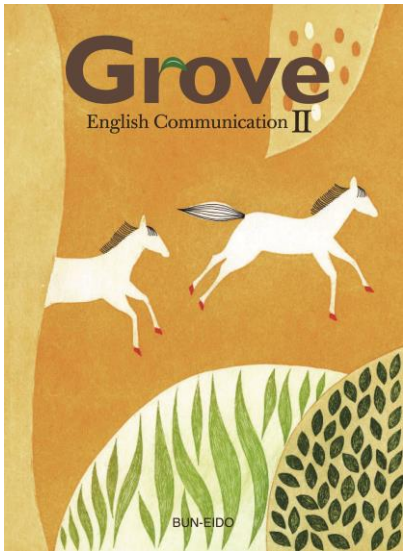
UNICORN シリーズの表紙は，王道を行く揺るぎのないコンセプトとデザインが基本だろう．ユニコンはこの書名を使い始めて以来，その象徴として一角獣のマークが使われて来た．モチーフはまずそれだと決めた．



1 回目のラフ案を出した後，担当者曰く「もっとかっこよくしてください．例えばポールランドのような…」．ポールランドは IBM など数多くのロゴやポスターを制作した，米国を代表するグラフィックデザイナーである．よく知ってはいたが，言われて改めて，ポールランドのエッセンスは何かを調べた．タイポグラフィを中心に，色やイメージのニュアンスを付加した，ちょっとキュートなデザインと解釈した．

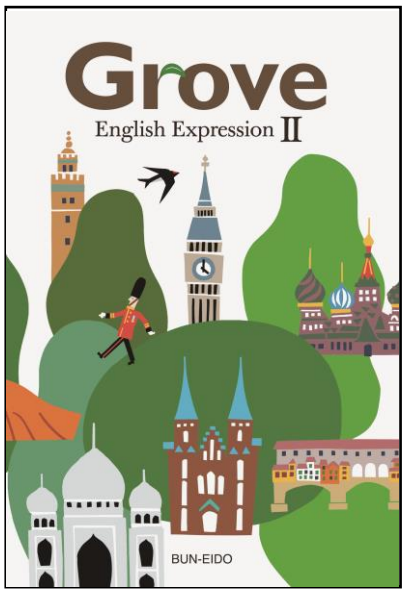
Los Angeles が LA となるように **U**NICORN English **C**ommunication は UC に，**U**NICORN English **E**xpression は UE と考えた．結果，それまで使ってきたユニコンのモチーフと併せ，かっこよさとニュアンスは出せたと思う．「かっこよくするだけがデザインじゃない」といつも学生に言っている．一角獣のモチーフとアルファベットを組み合わせ，ポールランドにはちょっと迫れないかもしれないが，ちょうどいい加減のデザインになったと思う．

Grove の表紙は，始めからイラストレーションと決めていた．親しみやすく明るいイメージが必要だからだ．打ち合わせを重ね，Communication は水上多摩江さん，Expression はもとき理川さんにお願いすることになった．



イラストレータによって作風や仕上げ方の段取りが違うので，進め方が大変重要になる．水上さんは版画を使って制作し，デジタル技術を多少取り入れながら進められている．

版画は，紙に刷った味わいがある反面，一発勝負（もちろん作家の経験と勘があってのことなのですが）の要素もあり「はい，それでお願いします」と言った時点で，ほぼすべてのテイストが決まってしまう．ちょっとドキドキの進行だ．しかし版画の持つ肌合いが最後の印刷にも反映され，かわいい絵柄が格調高く紙面に出現する．



一方もときさんは，色紙をカッターでざっくり切った線が特徴で，その線の勢いを生かすことが大事になってくる．あまり計画的だと線が生きないので，「こんなモチーフを適当に大胆にやってみてください」的なお願いになってしまう．

始めはこちらも恐る恐る提案したり，レイアウトをしながらイラストの修正をお願いしたりするのだが，性格の大らかなもときさんは，「どうぞ，どうぞ思う存分」と許してくれる．デザイナー冥利に尽きる楽しい作業をさせてもらった．Grove の 2 冊は，当初めざしていた“大人かわいい”イメージで，明るく楽しい表紙になったと思う．

書籍の表紙は，装丁という仕事の範疇で語られるのが一般的だろう．しかし，本来は，判型や本文書体，文字組，フォーマットを決めるところから始まり，実際のレイアウトまでを総合的にデザインしてこそ「本全体のデザインの完成」と考えるのが「ブックデザイン」なのだと思う．そういう意味で，教科書が採用されるという結果に繋がることを切に願うばかりである．